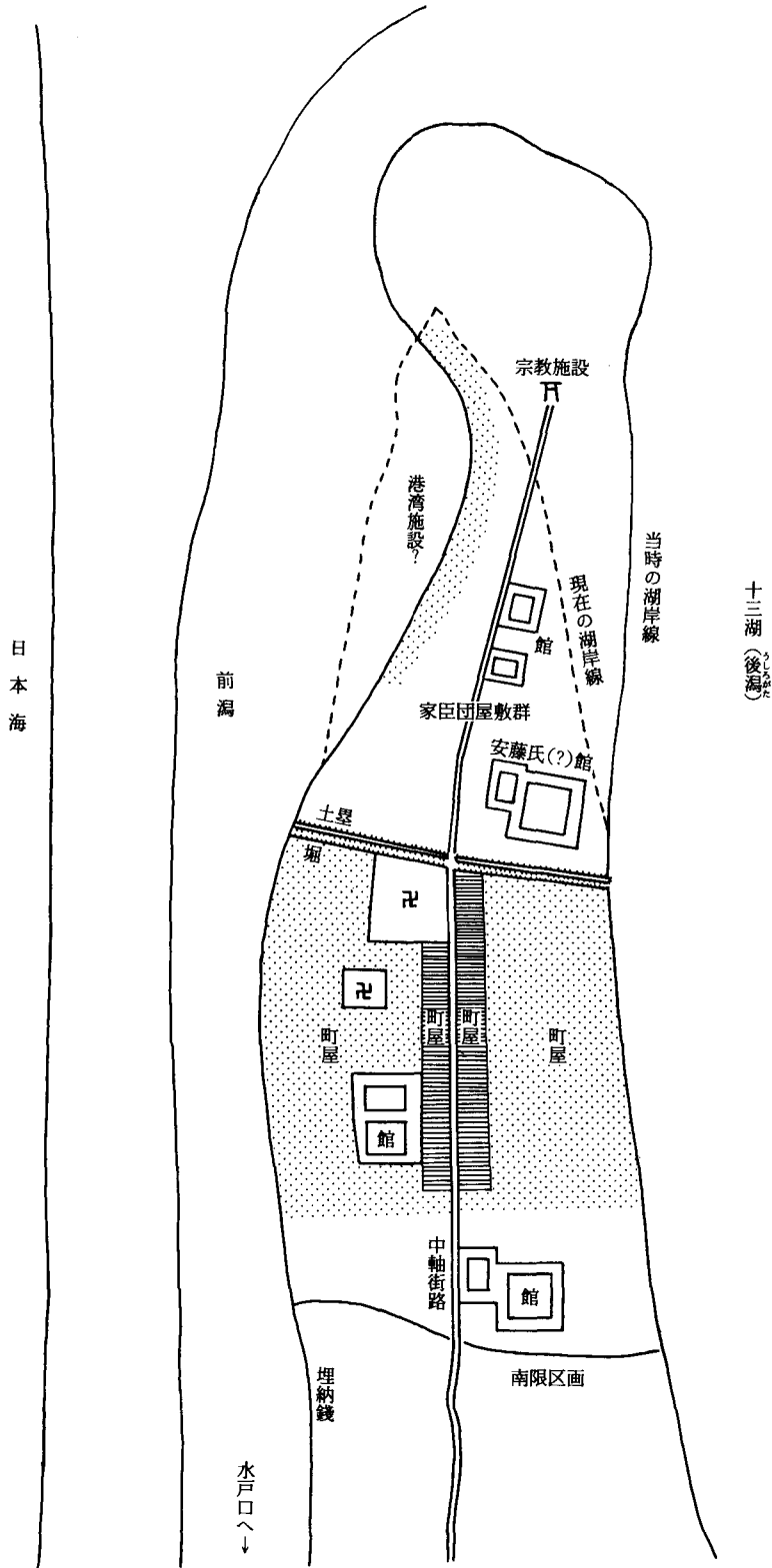


3 中世十三湊の構造

今回の調査の大きな目的の一つは、中世の港湾都市十三湊の全体的な構造を把握することだったが、幸い本書でこれまで述べてきたような様々な方法による調査の結果、ほぼその目的を達成することができた。ここで現時点での中世十三湊の都市構造の復原案についてあらためてまとめておきたい。当面、15世紀前半ころの最終段階（十三湊Ⅱb期）の様相以外は詳しく知り得ないが、それは最盛期の姿でもある。（第61図）



第61図 15世紀前半ころの十三湊中心部（想定復原図）

まず、水戸口と湊明神の地区や「隠居」の寺院などを除いた十三湊中心部は、砂洲の中央を土塁と堀で仕切られ、南側は基本的に町屋地区で、南北に走る中軸街路に沿って町屋が並び、その奥にもそれに関連した建物が続く。町屋の裏手には寺院・館などがあり、中軸街路西側北端の土塁に面した部分には、湊迎寺ないしその前身寺院がある。中心部の南限付近にも複郭の館がある。

土塁の北側は、基本的に領主側の施設が存在する地区である。中軸街路が堀と土塁を越えて、おそらく門を通過してこの地区にはいった右手（東側）には、主郭約100m四方で西側に副郭を持つ館が存在する。大ききの点では土塁南地区に見える館と大きな違いはないが、堀と土塁で守られた部分という位置から見て、この館が十三湊で最も重要な存在であったと思われる。館の主としては、確証はないものの、やはり十三湊の領主安藤氏の可能性が強いと見てよいだろう。館は、この他にも土塁南地区や、北側地区でも館かと思われる方形の地割りが認められ、同時期のものとすれば、安藤氏一族や有力家臣のものの一応想定されよう。安藤氏一族は、本来この十三湊にあって成長した海民だったのではないかという見方も出されており [大石 1994]、こうした館群は、そのような安藤氏の性格と歴史を反映したものであるのかもしれない。地割りの判読が正しければ、副郭を伴った構造の館が多いが、これも何を意味しているのか、さらなる発掘調査で明らかにすべき今後の課題は多い。

土塁北側地区の、現在は湖中になった部分には、近世の羽黒堂・伊勢堂につながる何らかの宗教施設が中世から存在したと思われる。土塁北側地区に古い時期の遺物が集中することを考えれば、この宗教施設が古い時期の都市計画の上で何らかの基準となる役割を果たしていたことも考えられよう。

都市構造の究明の上で現在の最大の課題は、港町十三湊の、まさに港としての機能を担う施設がどこにあったかである。これは現在のところ確かな徴証を得るに至っていないが、土塁北部地区西岸の、岸が弓なりにくぼんで前潟が広がった部分に想定してみたい⁽¹⁾。水深の浅い砂洲の東側（十三湖）へ外洋船が回り込むことは考え難く、また近世初頭に集落がつくられた西岸の土塁南側は、船の接岸は可能と思われるが、中軸街路沿いの町屋との間に砂丘の小高地があり、おそらく中世では平坦部分は更に狭く、都市域全体の中での有機的な活用にはやや難があったのではないと思われる。やはり土塁北側地区の西岸に港湾施設がつくられ、その前の入江に大型船が停泊し、岩木川を遡る川船への積替えも行われた、そのような光景を想定してみたい。この地区は領主側の施設が集中する部分であることから、ここに港湾施設があるとすれば、それは交易自体に領主が直接関与していることを意味することにもなる。この港湾推定部分は、後世の堆積によって現在では陸地化しており、いずれ発掘調査によってデータが得られるものと期待される。

(小島)

注

- (1) [村井章介 1986] もこの部分に港灣を想定し、人工的な地形である可能性も想定しているが、基本的には自然地形であろう。

参考文献

- 大石直正 1994「十三湊の安藤氏館と塩釜津」国立歴史民俗博物館編『中世都市十三湊と安藤氏』新人物往来社。
村井章介 1986「津軽十三湊－中世・北辺の港町」『週刊朝日百科 日本の歴史15 海』。